

北中生の「創り上げるもの」に期待

短い夏休みが終わりました。北中では今日から3期に入りました。テーマは「仲間と創り出す」。感染症や熱中症が心配される状況、また、学校行事の中止や変更が避けられない状況の中で、仲間と具体的に「何を」「どのように」創り出すのか興味津々です。

今年度は「これまでのように」が通用しないからこそ、生徒たちがどのような姿を見せてくれるのか私は本当に楽しみです。小さな変化でもよいのです。個々の変化でもよいのです。「これまで」という前例にしがみつかない生徒たちの動きが、どんどん生まれてほしいものです。

本日発行の三年B組の学級通信に、注目すべき事実が書かれています。

「九日間の夏休みが終わりました。休みを迎える直前、各教科担任の元を訪れ、『〇〇の単元の復習をしたいと考えています。プリントをいただけませんか』『〇〇単元が苦手です。おすすめの学習方法がありますか』と、主体的に動いていた姿がたくさん見られたことを思い出しています。（実は、私たち職員は、想像以上のプリントの準備にうれしい忙しさを感じていました。）」

夏休みと言えば、やりたいことがやれる時、勉強からある程度解放される時というイメージです。したがって、これだけはやろうという宿題が課せられるのが普通です。ましてや、休みの長さが例年の四分の一となれば、自分のやりたいことが最優先されても不思議はありません。

三年B組の通信を読むと、短いからこそ、自分のやるべきことを考え、実践しようとしていたことがわかります。課されたからやるのではなく、自分から求めようとしている点がすばらしいと私は思います。学習について、教師より生徒が前に出ている印象です。

これこそがまさに「主体性」です。短い夏休み、現在の危機的な状況、二学期以降の見通し……そういうものを考えて、自分のやるべきことを考え、実践します。そういう姿を通して新しいものが生まれてくるのではないのでしょうか。

ただし、こういう姿は全員に生まれてくるとは限りません。すぐにそれが生み出せる生徒、時間がかかる生徒がいるはずです。だからこそ学校、学年、そして学級があるのです。仲間の姿に刺激を受け、「よし、私も!」と気もちを高めることができるのが集団です。二学期からの北中生が「創り上げるもの」に今からワクワクしています。（八月十七日 記）